Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2022, Vol.31, 94-103

論文

中国成都市の幼稚園における環境教育の現状と課題

陳　安琪［鹿児島大学大学院教育学研究科］
前田晶子［鹿児島大学教育学系（教育学）］

Current Status and Problems with Environmental Education in Kindergartens in Chengdu, China

CHEN Anqi and MAEDA Akiko

キーワード：幼児教育、環境教育、中国成都市の幼稚園調査、主体性の涵養

１．幼児教育における「環境教育」の問題構制

1.1 教育改革のなかの幼児教育

教育改革に取り組む各国において、共通して幼児教育が改革課題の一つとして捉えられている。とくに、幼児期の能力形成がその後の就学を左右するという認識のもと、義務制の外にある幼児教育への改革の要請が高まっているのである。

たとえば、フランスでは、「保育学校」を義務化し、2019 年より３歳からの義務教育が実施されている。この政策は、幼児教育の小学校化という潮流の上にあるといわれ、社会的出自の差を早期からの公教育を通して解消するという意図が強いものである[1]。日本でも、2012 年に「子ども・子育て支援法」等の法整備が行われ、認定こども園、幼稚園、保育所を一体的な制度のもとに位置づけ、小学校との接続のための「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が統一して示された。ただし、日本の場合は、幼保一元化の論議が十分に深まらない中で、政治主導の制度改革として「押しつけられた」ものという指摘がなされている[2]。また、中国では、０～３歳の託児所と３～６歳の幼稚園教育の年齢区分による幼保二元体制を取っている。この点は日本と同様の歴史的背景を持っているといえるが、異なるのは、保護者の教育要求の高まりから早期教育を求める動向が存在し、ブランド幼稚園やフランチャイズ化によって要求に応える幼稚園が多いという点である[3]。

このように、幼児教育改革は、各国の教育政策の違いを反映して取り組まれ、その概要はさまざまであるが、概して義務教育・義務教育後教育の補完的な役割として制度設計がなされている点は共通しているといえる。

その一方で、現在の教育改革は、環境教育や ICT 教育、リスク教育など現代的な地球規模の課題に対応できる能力形成を目指そうとしている点に注目する必要がある。これまでの知識・スキル中心の教育計画は資質・能力の形成へとシフトすることが求められ、知識注入主義からの脱却が必須となっている。そのことを幼児教育において受けとめるとき、単なる義務教育の補完的役割に止まらない、幼児期固有の教育計画・教育内容の構築が必要になってくると考えられる。なぜなら、知

識・スキルの積み上げ式の学力モデルから、子ども自身の自己意識や動機づけ等を中核とする資質・能力モデルへの転換においては、人間発達の全体的な見通しの下での幼児期の固有性が問われなければならないといえるからである。

1.2 対象としての自然／主体としての自然

本研究に取り組むにあたって、幼児教育において環境教育を考えるということは、環境と人間の関係認識をめぐる本質的な検討が要請されることを意味しているという点に留意している。

井上（2012）は、「環境」概念をめぐる主体の問題を論じて、環境問題に対峙する環境教育では、自然を客体化する科学教育や理科教育とは異なり、「環境の主体である人間（自己）」[4]への自覚が問題となるとしている。つまり、近代における「自然」概念が人間の生にとっての対象であり、開発または保護という外部からの人間の関与を想定してきたのに対して、現代の環境教育の課題は、人間そのものも自然の一部であり、自然に主体的に関与する人間像への転換が求められるのである[5]。この意味で、日本の幼児教育改革において強調されている幼児期の主体的な学びについても、環境教育の文脈で捉え直すことが課題であるといえよう。

以上のような課題意識の下で、本研究では、教育改革の渦中にある幼児教育の現状を踏まえ、中国の幼稚園における環境教育についての実地調査を行い、課題を明らかにすることを目的とする。

２．中国における幼児期の環境教育の取り組み

2.1 環境教育の芽生えと変遷（1973 年から現代まで）

北京師範大学環境教育センターがまとめた『中国環境教育の発展と方向』（2003）[6]によると、1973 年 8 月、中国で第 1 回全国環境保護会議が開かれたことから環境教育の歴史が始まるとされている。これにより、中国の環境保護と環境教育事業が開始された。環境教育が始まったとはいっても、当時の国策の中心は経済優先であったといえる。その中心には、1978 年に鄧小平が第 11 回「三中全会」において、中国の高度経済成長の基礎を打ち立てる国策として「改革開放」を提唱したことにある。このため、経済発展が急速に進んだことにより、中国の持続可能な進歩に大きな制限をもたらすことが指摘されるようになってきている。工業製造を中心として経済発展を押し進め、鉱物資源を無制限に発掘し、廃棄汚染などの人口増加による自然資源に対する負担も強めている。その結果、経済は空前の発展を遂げたが、「先発展 後治理（まずは発展を優先し、後から改修する）」という姿勢への批判も提起されている。そこで、1983 年末、中国は第 2 回全国環境保護会議を開催し、「環境保護」を基本国策として採択したのである。

1992 年 11 月、国家教育委員会は国家環境保護局と共同で第 1 回全国環境教育活動会議を開催し、「環境保護は教育を基本とする」という方策を提出し、環境教育の地位と役割を認めた上で、

基礎教育における環境教育の重要性を指摘し、教員養成と教職のあり方に対して具体的な見解を提出した。この時点で、中国における環境教育の具体化を実現する段階に入ったと指摘することができる。環境教育に対する認知については、1995 年 7 月、国務院が第 4 回全国環境保護会議を開催し、「環境保護に関する若干の問題に関する決定」を行い、「宣伝教育を強化し、国民全体の環境意識を高める」ことを改めて明確に指摘している。

2005 年「国務院の科学的発展観の実施に関する環境保護強化の決定」では、環境教育を強化し、環境文化を発揚し、「生態文明」を提唱することが示された。生態文明とは、「人と自然、人と人、人と社会の調和共生、好循環、全面的な発展、持続的な繁栄を基本とする社会形態」を指している。これを機に、中国の社会発展形態は「先発展 後治理」から転換し、「辺発展 辺治理（開発しながら改修する）」という持続可能な道を歩み始めた。また、2008 年の北京オリンピックの際には、「グリーンな中国がオリンピックを迎える」という環境保護公益活動を展開した。その核心と本質は、人と自然の調和の取れた発展の生態文明を構築することであった。

2.2　中国における環境教育の課題　－学校・教育内容・教師－

中国における環境教育については、これまでにいくつかの調査・研究が行われている。

先に取り上げた『中国環境教育の発展と方向』（2003）によると、現在中国の師範学校で制度として環境教育の研修を提供できる学校はまだ多くない。中国の師範学校は、環境学部などとは異なり、環境に関する知識が脆弱であり、学問として教育されていない。したがって、環境教育に関する講義は学術性に欠け、必修化されていないことから、師範学生はもっぱら浅い環境知識しか持ち得ていないと指摘されている。さらに本書では、現実的な環境問題を分析し、解決する能力が不足していることが示唆されたのである。

顔瑞婷（2014）[7]は、中国に対する啓発として、日本の環境教育について論じている。論文の中で、著者は日本の環境教育が 1970 年代に導入され始めたと述べている。この時期から環境教育に関する内容が日本の小中学校の教材に登場し始め、また、児童の理解を深めさせるために、それぞれの課程において環境保護実践として実施されたという。90 年代になると、小中学校の環境教育指導資料が公表され、環境教育の目標、内容、対象、方法などについて詳しく述べられた。一つの独立した学科があるわけではないが、それぞれの課程に横断的に導入する方向がみられるという。

一方、中国では、学生は環境教育についての一定の理解を持ってはいるが、実践的な知識や経験が不足していると指摘されている。このように、中国では、理論と実践の断絶を招き、学生に環境保護の重要性を理解し体験させることが困難な状況にあると考えられるのである。

盛建峰（2018）[8]は、幼児環境教育における教師の教育力と教材開発の現状を調査している。現

在の中国の環境教育が十分に実行できていない原因は、教師の養成過程での環境教育に関する知識の不足にあると盛は指摘している。また、教師の正確な環境資源観を確立し、身近な資源に対する関わり方を重視し、環境保護に関する知識と認識を高めることで、「環境」を土台に位置づけた教育を実現することができると指摘し、このような教師への環境教育は長期的で実践的なプロジェクトとなるとしている。

以上から、中国の環境教育はいまだ知識偏重の傾向があり、実践的な教育が不足していると考えられる。個々の政策や法規がどのように日常の教育カリキュラムに導入されるかについては、具体的に議論されていないのである。また、中国の幼児期における環境教育の先行研究においても、幼児教育段階で環境教育に取り組むことができる保育者や幼稚園は少なく、ほとんどの幼稚園は課外活動として環境教育が行われており、環境教育を正規の課程に導入していないのが現状である。

2.3　幼児教育と環境教育

中国の幼児教育は、中華人民共和国教育部（日本の文部科学省に当たる）が 2016 年に「幼児園工作規程」（以下「規程」と略称する）を公布し、現行の幼児教育制度を確立している。「規程」によると、幼稚園は 3 歳以上の学齢前児童のための保育と教育を実施する基礎教育機関であり、学校教育制度の初期段階に位置づいている。その任務は、主に保育と教育を組み合わせ、幼児の「徳・智・体・美」を発展させ、心身の調和的な発達を促進することである。

中国の幼児教育は、多岐に渡る変遷を経て、現在は幼児の主体性を重視するものとして位置づけられている。このことは、「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成」することが幼稚園教育要領(2018)に明記されている日本の幼児教育との共通点である[9]。

加えて、近年では、世界の幼児教育において、「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development）」が注目されている。ESD とは、「現在と将来の世代にわたって、環境を保全し、経済が維持され、公正な社会を実現するという、持続可能な未来をつくっていくために行動様式の変化を促す」[10]ものである。

本稿では、以上のような主体性の重視と ESD の観点から、成都市にある二つの幼稚園の教育実践を報告し、中国における幼児期の環境教育の現状を考察する。

３．私立幼稚園 A 園の環境教育カリキュラム

3.1　A 園の基本情報

A園は、中国初の国際幼稚園である。当園は、有名私立幼稚園系列の幼稚園であり、「子どもに文化の主人、自然の主人、宇宙の主人を志向させる」という教育思想を提示し、成都において2010年代に創立したものである。この教育思想について説明しよう。

「文化の主人」とは、自国の文化価値に対する理解とアイデンティティを確立し、文化の違いに対する理解と尊重を通じて、世界文化を包容する広い度量と遠大な心を育てることである。

「自然の主人」とは、自然への好奇心を刺激し、自然に対する鑑賞力を育成し、人と自然との関係に対する理解力、自然法則に対する認知力、自然科学の方法で問題を探求し解決することや、自然と共存し生態バランスを保護することを目指している。感謝の気持ちで世界の万物に対処し、自然を保護し、自然と溶け込み、自然を愛する主人となることである。

「宇宙の主人」とは、宇宙的な視野から、独特で唯一の自己について認識し、潜在能力を発揮することである。子供の純潔で美しい心を育成し、愛と平和を理解し、健康な人生観と世界観を創立して、地球を大切にすること、そして社会に貢献して、他者に共感することを目指している。

この三つの観点の上に、当園の環境教育も位置づけられ、実施されている。

3.2　A園の環境教育カリキュラム

筆者（陳）は2020年3月から現地調査を実施し、6月まで継続して行った。特に、A園の環境教育カリキュラムを中心に調査を行った。

現在、中国の幼児期における環境教育は十分には普及していないので、A園のようなハイエンド幼稚園でも、環境教育に関する授業が日常の授業としては用意されていないのが現状である。ここでは、環境教育に関するテーマ活動を月に２回程度実施し、幼児の環境保護に関する思想を啓発し、環境保護観念を育成している。その内容を以下に示す。

３月　「植樹祭」の活動：

①園児たちを外に連れて行き、春を実感させる。
②園児たちは植樹したばかりの木のそばに看板を立てる。看板には、「愛護樹木　人人有責」（木を愛することは私たちの責任です）と書かれている。
③先生たちは様々な形で園児たちに植樹祭の意味を紹介し、園児たちに緑の世界の珍しい美しさを知らせる。園児たちは心の中で「環境を守り、自然を守る」という緑の願いを込める。
④先生は園児たちに野菜などの種と鉢を配り、園児たちは自分の鉢を適切な場所に置き、水やりをする。園児の責任感と愛情意識を育成する。
⑤続いて、先生は園児たちを幼稚園の菜園に連れていき、菜園の雑草を抜き、掃除をする。シャベルで土壌を耕す。園児は自分で種をまくことを体験する。別の園児はバケツを持って苗に水まきをする。真剣な様子である。
⑥最後に、園児たちが地球を保護するための絵本を描く。自主的に絵本を描く過程によって、園児たちは自分たちの小さな力で地球を守る方法をよりよく理解する。

４月　「地球日」の活動：

①2020年に世界各国が遭遇した環境問題を振り返る。
②気候変動に対応して人間は何ができるかを議論する。A幼稚園は、地球日の活動の中で７つの方法を提示して、園児たちに気候の変化を理解するよう助け、現世代と次世代にとっての地球の重要性を意識させる。
1)リサイクルをする；2)木を植える；3)水を節約する；4)電気を節約する；5)気候変動に対応する身近な方法を伝播する；6)公共交通機関などのグリーンモビリティを多く利用する；7)プラスチックの使用を減らす。

③園児たちを環境保護に参加させる。
1）虹の卵箱チャレンジ：園児たちは古い卵箱を用意し、くぼみごとに色を変えて塗る。そしてくぼみの色と同じものを集めて入れていくことを楽しんだ。
2）種をまく：園児たちは、種を選び、空の牛乳箱や卵箱、その他の生活の中の古い容器にまいて、親と一緒に観察しながら、これらの「生命力に満ちた種子」が地球上で育つことを発見する。

５月　環境保護活動：
①環境保護機構の講師を招いて、幼稚園の先生に環境保護に関する知識を育成する。中国では現在の教師養成の中で、教師に対して専門的な環境保護の知識の育成訓練を行うことは稀である。そのため、現職教員の研修を行っている。今回は、講師がゴミの分類と資源のリサイクルについて説明していた。
②園児を資源の回収と再利用に導く。例えば、先生が園児たちの古いTシャツを本用の布袋に作り替える。また、先生は園児たちを組織して、飲んだ後のペットボトルを切り紙などで飾り、綺麗な筆立てを作る。
③活動の終わりに、先生はもう一度園児たちにごみの分類の知識と身の回りに捨てられる資源をどのように再利用するかを教え、彼らが放課後に家に帰って親と一緒に作業をすることを提唱し、生活の中で実践するよう指導する。園児らは、料理後の生ゴミを土の下に埋めて有機物にすることや、スーパーのプラスチック袋をゴミ袋に使うなど、手を挙げて発言していた。

６月　「世界環境の日」の活動：
①先生は「世界環境の日」に関する知識を紹介する。世界の水不足の現状の説明から、園児たちは全世界の71億人がきれいな飲用水を使用できないことを知る。
②先生は水に関する故事、水の源、水の種類、さらに私たちの生活用水がどのように生まれたかを紹介する。
③園児たちに、体験を通して、水を節約する良い習慣を身につけさせる。先生は手を洗う際に水を節約する具体的な方法を身につけさせる。例えば、手を洗う時は蛇口を小さく開け、石鹸をこする時はまず蛇口を締めて、手を洗う時は再び蛇口を開けることを教える。
④人間の生活だけでなく、自然界にも水が欠かせないことを理解させる。先生は園児たちに日常生活の中で節約した水を植物に灌漑するように教える。園児たちは自ら水を節約すると同時に、植物が水に満ちた状態で成長する過程を記録することができた。
⑤最後に、水滴の形のぬいぐるみのおもちゃを先生が作る。この過程で、園児も手作業を手伝い、それを通じて興味を持たせる方法で水の重要性を深く認識させる。水滴のおもちゃを持って帰り、家に飾り、このおもちゃを見て、水の節約と保護を常に意識させる。

以上、筆者が3月から6月まで成都市のA園で実地調査を行った時に記録した当幼稚園の環境教育に関する行事の概要である。（写真は３月と６月の活動より筆者が撮影したものである。）

3.3　A園の教育目標に基づく環境教育の取り組み

先にも触れたように、A園はブランド化されたハイエンド幼稚園であり、教育目標は「どのように子どもの主体性を育成するか」とされている。「主体性の向上」は、当幼稚園の発展目標として言及されているものである。従って、上述した3月から6月までの環境教育カリキュラムにおいて、園児の参加、創造力、主体的思考力をどのように鍛えるかに着目して行われていることが分かる。

例えば、3月の「植樹祭」を通じて、幼児に自然との「対話」をさせ、労働の楽しみを体験さ

せ、さらに、植物を保護する実践の中で自然に対する愛情の涵養を企図していた。また4月の「地球日」の活動では、全世界の地球環境を見渡せるような取り組みを行い、幼児が小さい時から世界の人々について想像し、環境保護の取り組みは全人類の共同発展のための有効な道であるということを理解させている。5月の「環境保護」活動では、園児らにゴミの分類と資源のリサイクルに関する知識を獲得させただけでなく、教員側の環境教育の不足に対する研修も行っている。また、Tシャツなどの手作り活動を通じて、園児に自分の努力で環境を守るために資源の再利用を考えるよう促している。さらに、6月の「世界環境の日」活動を通じて、世界の人々や他の生物の生存の現状を教え、幼少期から他の生物に対する共感を育ませている。なお、水資源の重要性を強調する活動では、子どもたちが水を節約する習慣を身につけるのに役立つとともに、水資源の再利用についても考えさせている。

当幼稚園では子どもの自覚する能力を重視しており、「自ら気づく」ということが教育の基本にあるとされている。環境保護の意識を養うためには、単に子どもに知識を教えるだけでなく、子ども自身の体験を通じた学びを行い、主体性を育むことが必要であるとされていることがわかる。

４．公立幼稚園の取り組み、A園との比較

4.1　玉泉幼児園の基本情報

次に取り上げる成都市の玉泉幼児園は、四川省の機関事務管理局に属し、四川省が直接管理する公立幼稚園である。玉泉幼児園は「人を基本とし、愛を魂とし、教育と保育を重視し、全面的に発展する」という教育目標をもっている。しかし、公立幼稚園の属性として中華人民共和国教育部（日本の文部科学省にあたる）が発表した「幼児園工作規程」（以下「規程」とする）が貫かれているため、私立幼稚園とは大きな違いがみられる。

「規程」によると、幼児教育従事者は、幼児が早期に仕事をし、協力し、生存に必要な基礎を打ち立てる重要な時期であると認識する必要があるとされている。他方で、「幼児園教育指導綱要」では幼児教育は「基礎教育の重要な構成部分」であると記述され、それにより幼稚園での教科教育が重視されてきたことから、幼稚園の“小学校化”が問題として指摘されてもいる[11]。これを受けて、2016年に改訂された「規程」では、道徳教育が重視されるようになった。もっとも、生涯教育の観点からいえば、早期教育は人生全体の教育の基礎であるので、特に道徳教育が深められる時期であることは重要である。「規程」の中でも、道徳教育は児童教育の核心であり、子どもの強固な人格の基礎を成すことが示されている。そのため、玉泉幼児園は、この「規程」に基づいて、環境教育は道徳教育カリキュラムの中に位置づけられ、計画されているのである。

今回の調査は新型コロナウィルス感染症の蔓延のため、筆者（陳）が実際に幼稚園にて現地調査をすることができなかったため、文書を通して実施した。調査期間は 2021 年 2 月 15 日から 3 月末までである。以下は、調査期間中に玉泉幼児園で行われた環境教育に関する実施状況をまとめたものである。

4.2　公立幼稚園の環境教育カリキュラム

1996 年 6 月の「幼児園工作規程」では、すでに幼児の環境保護意識を高めることを主な教育目標の 1 つとすると言及されているが、実際には幼児教育政策上の課題が存在していた[12]。例えば、教育部は環境教育に関する教科書を発行しておらず、また、カリキュラムにおける環境教育の時間数等も厳密には設定していない。このため、筆者が調査を行った玉泉幼児園では、環境教育は課外コースとして行われている。その内容は以下の通りである。

活動 1　「世界の水の日」の活動：

1）水の役割について考える。
①人間や他の動物に飲用水を提供する
②植物を灌漑する
③工業生産に用いる
2）日常生活でどのように水を正しく使うかについて考える。
①手を洗う時は蛇口を小さく開け、石鹸をこする時はまず蛇口を閉め、手を洗う時は再び蛇口を開ける
②野菜を洗った水は植物の水やりに使う
③手を洗った水を便器の掃除に使う。
3)「水資源の節約」をテーマにしたポスターを制作する。

活動 2　「食糧節約」の活動：

1）先生が稲の成長についてのビデオを放送して、園児が食糧の由来を知ることができるようにする。
2）昼食の時、先生は料理を全部食べさせるように呼びかける。食事後、先生は園児に自分で食器を洗うよう促し、園児に水を正しく使う方法を思い出させ、食料と水を節約について学ばせる。
3）園児が上述の経験に基づいて「食糧節約」をテーマにしたポスターを制作する。

活動 3　「ゴミの分類」の普及

1）先生は園内にゴミ箱を設置し、園児の注意を引くためにキャラクターの絵を貼り付ける。そしてゴミ箱の前でゴミをどのように分別するかを示す表示板を作った。
2）園と家庭が連携する活動として「家の古いもののリサイクル」を行う。
①使ったティッシュの箱をクレヨンの収納箱にする
②洗濯した水を便器などの洗浄に使う
3)「ゴミの分別」のポスターを作り、教室に貼る。

4.3　玉泉幼児園の現状分析及び A 園との比較

先にも述べたように、公立幼稚園では、「規程」に基づいて日常の授業目標が設置されているため、この幼稚園では環境教育は課外コースとして導入されている。上記の活動からも分かるように、この幼稚園では教師の教授を重視しており、幼児が自主的に探求する主体的活動は少ないことがわかる。全ての活動において、園児が自主的に連想したり実践したりするのではなく、どの段階でも教師が主導している。例えば、活動 3 では教師がごみの分類方法を列挙するだけである。また、活

動２では、ビデオを園児に見せるだけで稲の成長を理解させせようとしているが、園内のビオトープの建設や園児が田植え体験をすることができれば、主体的な関わりが期待できるのではないかと思われる。

以下では、私立Ａ幼稚園と玉泉幼児園の違いをまとめてみたい。

１）カリキュラムの設定

私立Ａ幼稚園では、１年間を通じた体系的なカリキュラムが設定されている。月一～二回の環境教育活動が計画されており、また世界における環境保護活動と関連づけて設定されている。環境教育が世界的な取り組みとなって初めて有効性をもつという考え方がここに貫かれていると考えられる。逆に、玉泉幼児園の環境教育活動は系統的に規定されていない。また、個々の取り組みは日常生活の行動を矯正するだけものとなっており、全体として環境保護観念の育成には繋がっていないといえる。

２）教師の熱心さ

環境教育を実施する上で、教師の熱心さは大きな関わりがある。Ａ園は有名私立幼稚園系列の幼稚園として環境教育を推進しており､教師の研修においても環境教育に関する講演等を行っている。筆者が「植樹祭」を観察した際には、教師が子どもたちを連れて自ら木を植える体験をするなど、よりリアルな体験を与えようと工夫し、取り組んでいた。

他方で、玉泉幼児園では、当園の教師に対する環境教育の研修等は行っていないという。これは多くの公立幼稚園に共通している問題状況であると考えられる。筆者が行った玉泉幼児園に対する書面でのインタビュー調査の中では、「私たちの幼児園では環境教育に関する課外活動がありますが、この活動は学業の要求ではないので、教師の専門的な資質に対する要求も高くない」と教師から説明された。

３）子どもの参加度

Ａ園における子どもの参加度は、植樹、リサイクル、ポスターやおもちゃの作成など、毎回の取り組みに必ずその機会が設定されている。つまり、子どもが活動を通して、主体的に環境について考えることを重視しているのである｡また､教師がまず実践することで子どもの関心を高めており、ここに教師の熱心さが顕著に表れていた。

他方、玉泉幼児園の方は、書面調査のみであったため、子どもの参加の具体的な姿を観察することはできていない。しかし、先の活動内容の範囲では、教師による教授が中心であることが窺われる。したがって、子どもの主体性の涵養と子どもの参加度は、Ａ園と比較すると、玉泉幼児園ではさほど重視されていないのではないかと考えられる。

５.「一領域としての環境教育」を脱するために

本研究では、成都市の２つの幼稚園を取り上げ、環境教育の実施状況を整理した。また私立と公立の比較を通して、私立幼稚園の場合はカリキュラムの自由度が高いことなどにより、積極的な環境教育が行われていることが明らかとなった。

しかし、私立幼稚園も含め、幼児環境教育の現状に通底する大きな課題もある。２園に共通しているのは、現段階の教育活動が「一領域としての環境教育」に止まっているという点である。「一領域としての環境教育」とは、中国の現行の教育制度の中で環境教育が諸教育目標の一つとして位置づけられているだけであり、現時点では道徳教育の一分類とされていることを指している。先にも触れたが、「道徳教育としての環境教育」は中国における環境教育の特殊性でもあり、今後の研究でその成り立ちを明らかにしたいと考えているが、しかし、数学や科学などの教科教育との関連づけが進まないという点では障害となっているといえる。

従って、「一領域としての環境教育」の課題を克服するためには、日常的に環境教育を導入するために、「基盤としての環境教育」を構築することが重要であると考えられる。つまり、教科横断的に環境教育カリキュラムを組織化するなどの取り組みが求められるのである。先も述べたように、環境教育の目的が ESD を目指す社会変革にあり、その中心に、環境を対象として捉えるのではなく、人間もまた環境の主体であるとする人間観の転換が必要であるとすれば、環境教育を領域化することは理念と方法に矛盾を生じさせるといえる。むしろ、教育・保育の全体を通して主体的な活動や参加を促す仕掛けを整えることが有効であると考えられる。

本研究では、中国では環境教育が課外活動や、道徳教育の一領域に位置づけられている状況をみてきたが、このような領域化はなにも中国だけのことではない。理科教育等の一部で取り扱う場合も同様であるといえる。しかし、これからの環境教育を考えるとき、とりわけ幼児教育においては、主体性の涵養としての環境教育を教育全体の基盤とすることが求められるのである。

---

[1] 小笠原文（2021）「フランスにおける保育学校の動向」広島文化学園大学大学院教育学研究科『子ども学論集』p. 84。

[2] 大宮勇雄他編（2017）『現場の視点で新要領・指針を考えあう』ひとなる書房、pp. 13-15。

[3] 爾寛明（2019）「中国における幼稚園教育の現状と幼稚園教諭養成について」『桜美林論考 教職研究』p. 27。

[4] 井上美智子（2012）『幼児期からの環境教育』昭和堂、p. 138。

[5] 前掲『幼児期からの環境教育』p. 141。

[6] 北京師範大学環境教育センター・黄宇（2003）「中国環境教育の発展と方向」、『環境教育』、pp. 9-12。

[7] 顔瑞婷（2014）「日本環境教育的発展及啓示」『科教導刊』pp. 7-8。

[8] 盛建峰（2018）「幼儿環境教育中教師開発和利用資源能力探索」『成才之路』p. 41。

[9] 中尾美千子（2008）「中国の幼児教育事情について「就学前教育」－日本との共通点とその差異点について」『関西女子短期大学紀要』pp. 37-46。

[10] トランスファー21 編著、由井義通他訳（2012）『ESD コンピテンシー』明石書店、pp. 13-14

[11] 程秀蘭（2014）「多学科視座中幼児園教育“小学校化”現象透視」『教育研究』第 9 期、pp. 69-76。

[12] 陳倩倩・能條歩・田中住幸・中本貴規（2020）「自然体験教育と環境教育の視座から見た日中の幼児教育における一考察」『北海道教育大学紀要』pp. 247-262。